

2010

函館学

キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2010

第5回講座
講義資料

「タウン誌『街』表紙にみる
60～70年代函館の美術状況」

輪島 進一 函館短期大学 教授

日時：平成22年11月6日（土）午後2:00～3:30
会場：ホテル法華クラブ函館

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

わじま しんいち

輪島 進一氏 函館短期大学 教授

専門分野は絵画。

函館市出身。市立函館東高等学校、北海道教育大学札幌分校を経て、同大学院札幌校修了。函館中部高校、室蘭栄高校、小樽桜陽高校などで美術教諭をつとめる傍ら、絵画創作に取り組む。1995(平成7)年、北海道教育大学大学院美術教育研究科を修了し、この後、八雲養護学校高等部で病弱児の美術工芸教育を担当。2009年4月からは函館短期大学で教鞭をとる。

独立美術協会会員、全道美術協会会員、大学美術教育学会・北海道芸術学会に所属。

作品「雨あがる」(市立小樽美術館収蔵)ほか、北海道近代美術館、道立函館美術館等に絵画作品が収蔵。独立展・全道展審査員もつとめる

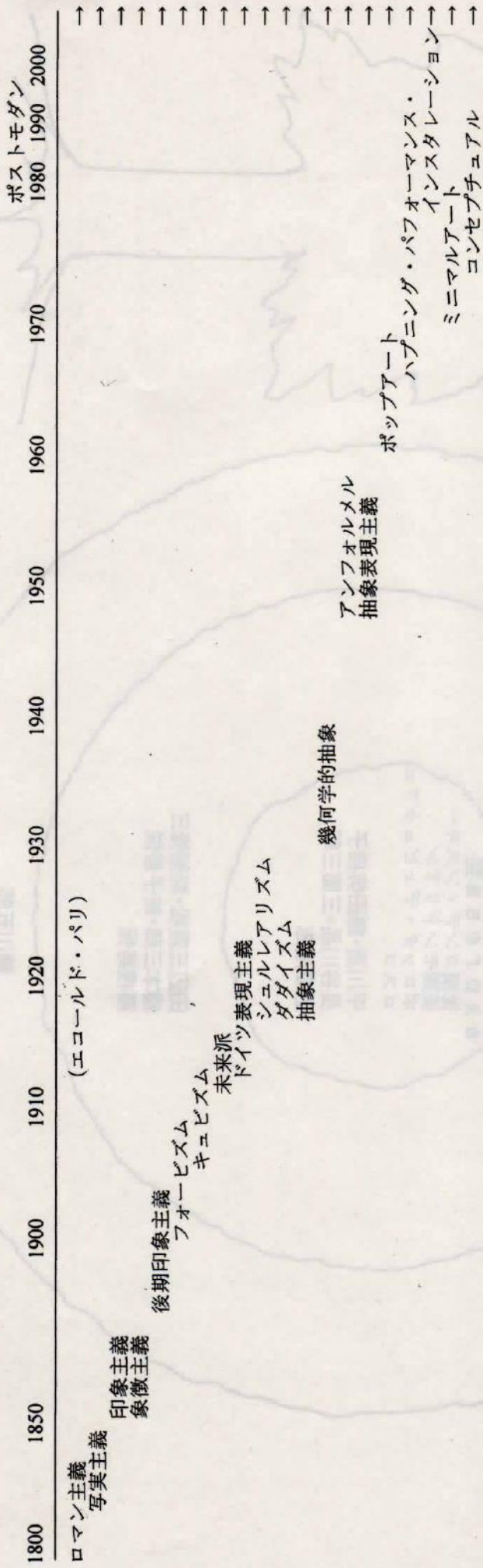
タウン誌『街』とは

1962(昭和37)年、『函館百点』と題して創刊。その後『はこだて』『街』と改題し月一回刊行。市内の喫茶・飲食店などに置かれ、ながく市民に親しまれてきた。

作家・評論家の木下順一(1929-2005)が編集発行を担い、文芸・地域史研究・時事評論などを掲載、表紙・挿画には蛸子善悦・箱根寿保ら地元画家が多数参加した。かつて松風町・大門で隆盛を誇ったクラブ・キャバレーの宣伝広告を数多く扱うなど、『街』は函館の繁栄とともに歩んだ。

木下の死去に伴い、2005年に一旦休刊するが、元編集者・有志により翌年復刊、現在は年4回刊行している。

□主にモダニズムから現代までの美術史



<世界の主な画家達>

セザンヌ

ピカソ

カンディンスキー・モンドリアン

ジャン・デュビュッフエ(子どもの絵に市民権を与えた、これ以後評価が始めた)
ポロック・デ・クーニング
ロスコ

ウォーホル

<函館に関わる主な画家>

田辺三重松 1897

岩船修三 1908

橋本三郎 1913

鞆川五郎 1919

平川勇 1922

鎌田俳捺子 1923

長谷川晶 1925

三箇三郎 1926

木村訓文 1932

蛭子善悦 1932

箱根寿保 1936

近堂隆志 1939

瀬戸英樹 1940

1989

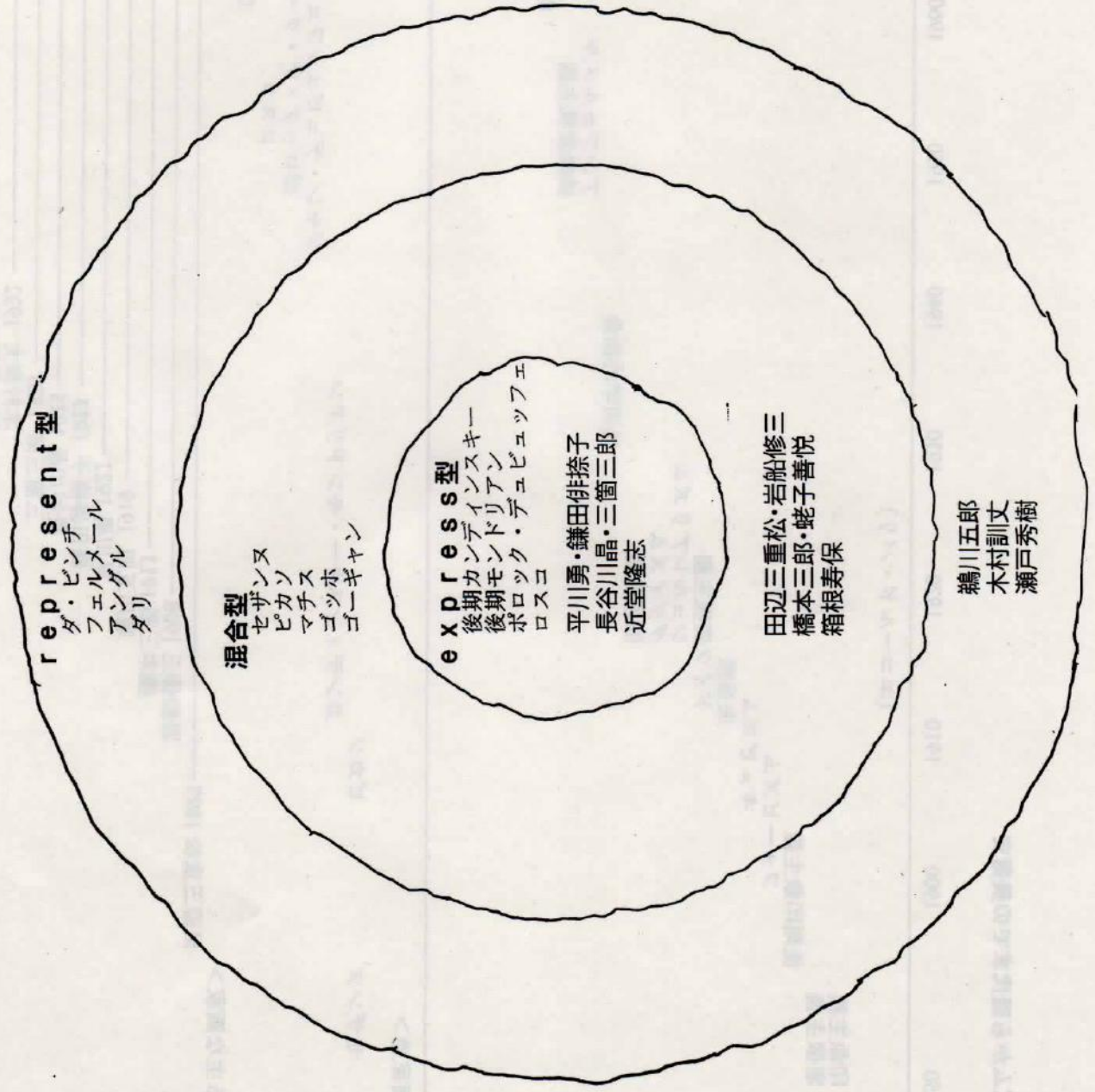
1989

1989

1993

1999

口現代までの美術史を同時的空間的に解釈すると



represent 型

ダ・ビンチ
フェルメール
アダリ

混合型

セザンヌ
ピカソ
マチス
ゴッホ
キャン

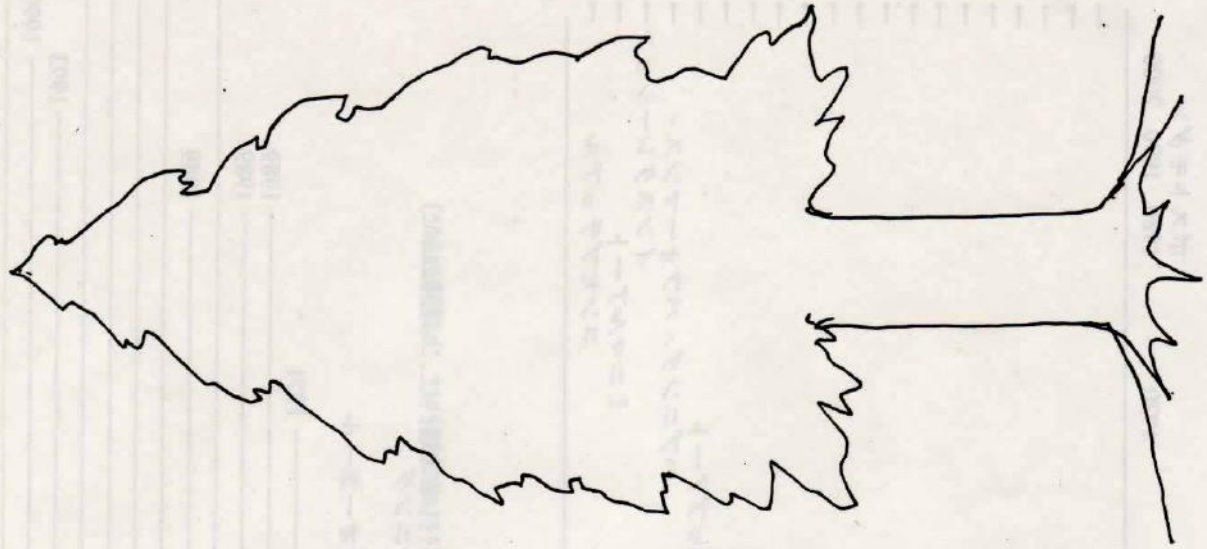
e x p r e s s i v e 型

後期モロッコ
ホルロス
コ

平川勇・鎌田伊捺子
長谷川晶・三箇三郎
近堂隆志

田辺三重松・岩船修三
橋本三郎・蛭子善悦
箱根寿保

綿川五郎
木村訓文
瀬戸秀樹



画家 箱根寿保

1999年4月21日、画家箱根寿保は急逝した。持病をかかえながら創作意欲は旺盛で、若い後輩の指導にも情熱を注いでいた。

小誌の表紙画とカットにも独自のイメージを描いてくれた。仏像を想わせるふくよかな女性像がとくに印象的だった。

8月19日から、北海道立函館美術館で開催される「箱根寿保展」にちなんで画家と交流のあった7名の方に思い出を一つづつってもらった。

バッカスの微笑

伏木田光夫

箱根寿保が逝って、僕のまわりには角のはえたバッカス達は、すっかりいなくなつた。

角笛を吹いたり、乱痴気騒ぎをする、あの意地悪どもの一群である。

僕といえば美術学校の三年生の時、青春のオマンマを食べさせてもらった「夕日美術社」の忘年会で、しこたま飲んだ酒を全部、都営地下鉄で吐きまくつたのが最後で、なんとしてもバッカスの徒のハンコをもらえなかつた。

酒という奴は深酒して死ぬ思いをしない

と、酔いの悲しさや淋しさをくれないもので、かくして僕はデカダンの深淵をついに見ないでしまった。

親友の福井正治や箱根寿保を見ていると、酒とのつきあいも死にもの狂いで、晩年はついにバッカスに背負われて逝つてしまった。その重味に分だけバッカスは彼等に悲しみの美をくれたのだと僕は思っている。

福井正治にくらべると箱根は少々悪党ぶるところがあつて、小心であつたから、まともな人間にたち惚ろうとした。断酒をし

たり、入院したりして、愛妻のそばにいたかつたのだらう、小ずるく立ちまわつたけれど、結局、あの角笛の音色から逃れることが出来なかつた。それ故、箱根は自分のかみさんにサンタ・マリヤを見た男だった。こういう男の横に生きた女性は、なんと悲しく、愛おしさを男に感じたことだらう。バッカスに背負われて行く男に、マリヤにならなければならぬ女はつらい。

箱根芸術を想う時、僕はかなりつらい手紙を書いた想いがある。「もつとグニヤグニヤで、もつと悲しい弱い絵を掛け」と書

き送つたことだつた。

彼にとっては、生きていくための懸命なバランス。理性の勝利を夢みる堅固なる大地。あのまったく箱根の本質と極をなすマチエールや地に眠る土偶の永遠のあとが、など箱根の世に生きるためのバランスという奴は、幻影でしかなかつたのではあるまいかと思うのだつた。

彼の代表作でありつづける「日本パンザイ」のおおらかなバッカスの角笛の音。まるでグニヤグニヤになつた、自画像といつているキリスト像など、箱根の漣味は身を

けずらないと出てこないものだつた。シューベルトの音楽からわき出た「冬の旅」の作品群は弱さによって翼をもつた芸術であつた。

僕は昔から箱根と芸術論をする時は、用心して良い服はぬいたものだつた。美術学校時代から、酔つて最後はぐつと目をくらんでくる。それをそろそろものなら、もう負けになるのである。次にあの小悪童はまだ角が小さい時から、したたかで煙草の火で服を焼くのだ。僕はかくして、用心していい服は着なかつた。

箱根が逝つて、冬服を整理していると、昔、彼に焼かれた、背中に丸い焼あとのあるホームズパンの服が出て来た。僕は服を抱いて友を想い、涙した。

僕のまわりのバッカス共は皆な早々にあの世に急ぐ奴ばかりだつた。そして深淵を見たこともない、小きれいなバランスの良い、良き人々ばかりが残つてしまった。

美神はすました顔をしているけれど、どうやらバッカスが一番好きらしい。この魔性こそ芸術の本質に横たわる微笑だ。

(画家・国画会 札幌市在住)



箱根さんが一番好きなポーターだといふほどよく飲んだ(国野)

(箱根さんのサイン)

西野鷹志

ポロ自転車にのつた赤いセーター姿が目まを横切つた。あれ、箱根さん。髪をうしろにたばね、古びたシオルダーバッグを肩にかけている。やっぱり、彼だ。五稜郭の街角で今

日も出えるかと、つい思ってしまう。

箱根保さんは、味わい深い作品と生きさまを感じて、さつさと世を去った。絵はやはり油と彼はいが、水彩とか即興的な絵もい。シューベルトの歌曲「美しき水車小屋の娘」を題材にした二十枚の連作は、亡くなる一年前に描きあげた。話をもちかけて五年、本気で画家が取りくんで半年であった。歌曲をまきこみ想をねつて、和紙に一筆書きのごとく絵筆を走らせる。即興だ。一度と同じ絵は描けない、という。色づかいは更に豊かになり抽象がまぎって、画家の新境地をかい間見せてくれた。

音楽を愛し文学を好んだ。ベートウエンもい、やっぱりモーツァルトさ、と五ひた家に優雅で快い曲がひびく。演歌好きがいてもカンベンしてくれと天上の音楽が鳴りつづく。が、好んだ

モーツァルトには、寂しさと哀しみが隠れている。本棚に並んだ蔵書に持主の心情が、まま、顔をもろかせる。『雄の隨筆 来る日去る日』を生前、借りた。火毛の人がポルトガルにのがれた日々をつづっている。画家が愛する意味が見えた。破滅型人生にひかれていたのだ。木幸治の乳母だけが住んだ津軽の十三湖に近い漁村を訪れた話を熟くぼく語りもする。さらに、画家モディリアーニの野たれ死にあこがれる、とふともらす。

箱根さんをしたり集う絵がき、若者を楽しませる彼の後姿に、モーツァルトや破滅型人間が放つ寂しさが漂っていた。一方では、写真家タッド若松が撮った鱒淵子子のノーブラジャ+姿の大判ポスターがお気に入り、寝るたびにベッドから見あげていた。

エミール・ゾラが書いた小説「作品」に登場す

る主人公クロードは、印象派の画家で、作品が世に受け入れられず、首をつって命を絶つ。絵が描けず苦悩する主人公像が小説となって、己れがモデルと思ひ込んだモザンヌは、少年時代からの親友ゾラへ別れの手紙を送った。苦悩は、画家にかぎらず創作する者の宿命だ。箱根さんは、晩年、キリストを描きはじめた自分とも格闘し、苦悩を深めたのだろう。筆一本で、絵と生きさまに立ちひかつた画家らしい画家であった。また一人、画家が消え一年がすぎた。

今月、箱根さんの展覧会がある。その折じり会い。オープニングのあと、久しぶりに好きな焼肉を食うよ。昼酒だけ、飲み放題でね、箱根さん。

(函館山ロープウェイ側取締役社長)

追憶のなかの箱根さん——阿蘭陀館の頃 佐藤玲子

十日ほどの旅から帰り、溜まった新聞を読んでいたら「画家箱根保氏死去」の文

字が目に入った。リビングに差していた朝の光がすつと陰った感じを覚え、函館の街

並みが浮かんだ。箱根さんがあの貌で、あの声で深く生きた街もこれで寂しくなる

六、と心底おもった。

彼との出会いは二十七、八年前にもなるうか。或る日のこと、私は駅前でバツタリ池田基三郎おじと会い、連れだつて松風町方向へ歩いていった。その時、下駄の音を響かせ向こうから男が走ってきた。「よお箱根君」「アツ、池田先生」絵描き仲間であるらしい二人は親しげに笑った。が、箱根氏は知人の見送りとかで急を要するらしく「失礼します」とまた疾風の勢いで走って行った。「彼は才能がある。俺に言わせれば、鬼才だな」私も画家の名前だけは知っていた。長髪を麻ヒモで結えた、Gパンの瘦躯は自在な生気が横溢して見えた。私達は電車で文雅堂へいき、用事をすませたから「阿蘭陀館」の階段を上がった。

ドアチャイムが鳴りだてる扉を押すと、なんと箱根氏が窓側の席でビールを飲んでいるではないか。「おお、今日はよく会うなあ」

おじは私を、俺の親戚だ、と紹介する。そこへ木村訓三氏が現れ、たちまち賑やかな酒になった。個性の塊、センスの刃先す

るとい面々の会話は価千金で、五稜郭界限をハシゴして、思わぬ深夜の帰宅となつた。

そんなことから阿蘭陀館とも親しくなり、別に誰と約束したわけでもないのに足が向いた。

レトロな物が並び、マスターの津川さん夫妻がいて、顔なじみの誰かれと言葉を交わす、その空間を私は好んだ。常連の大方は、地味な生活者でありながら、絵に限らず、内燃するものをさまざまな方法で創っていて、中心に箱根さんがいた。彼は語りの手で、東京での画学生時代のことなど、腹を抱えて笑わされた。

けつこう卑猥な話もするが、いつも独特の言葉のエキスを酔わされる。そして一番面白がつているのは当の本人で、そのうち身をくねらせて踊り出す。愉悦を求めるハートは並みではない。津川さんは、店のシャッターを半分閉じる。それは一種のサインであるかのように常連客は心得て、いそいそ入ってくる。

誰かが本町市場へ走り、鮭の刺身を買

てきた。クッパのままで合合合合、コーヒーがビールに変わる。淡い灯りの元で四方山談義がとび交い、笑いがはじける。みんなこのひと刻がうれしいのだ。いいぞ、阿蘭陀館モンパルナス！ 私は心で喊声を上げる。

あれは雨の日、阿蘭陀館も暗く濡れそぼつていた。「俺ねえ、心臓が変なんだ」「えっ」心なしか箱根さんの目の表情が弱い。

「脈と鼓動がズレるの。ほんとは同時だよな。脈のあとから間を置いて心臓がドーン、つて。胸がこら熱くなる感じだよ」「ああ、それキカイ収縮でしょ。病気になるより体質的なもので、スポーツ選手にもあるんだつて」

箱根さんがそんなことくらい知らないわけがないのに、私は更に「心臓が違すぎるのも考えものだよ。歳とつてあちこち利かなくなつても死ぬに死ねない。それ、価値ある長命つて言うかなあ」

「なんだい、大事にしなさい、病院へ行ったほうがいいわ、とか言ってくれと思うつ

たら……」

「私はイサつて時に早くキリが着いてほしいと考えるほうだから」

そうだ、考えようだよな、と箱根さんはいつもの人にかえった。

「歳をとつたらさ、どこか古い建物でも購つて改造して、気心の知れた連中と共同で住むつて手もあるわな」

「それ、淋しくなくていいねえ。私と専主もひと口のせて」

彼の夢が、なんだか実現不可能なことでもなく思えた。しかるに箱根さんは、典子さんと、トルコ石の光沢をはなつ作品と、いつばいの逸話を残し、アツとの間に逝つた。

箱根さん。常連客がつぶしたような阿蘭

陀僧はそちらで繁盛してるのではないですか。あなたは、先きに逝つた仲間とゆつくりお酒をやりながら、あの一流のジョークをとばしているのでしょうか。心臓の不安も、老後のことも一切合財、無縁に……。

よろしかったら、カウンターの隅を少し空けて置いてくださいますが、会草
(同人誌「緒里尽」代表 札幌市在住)

思い出の箱根師匠

辻 功

箱根先生が亡くなられて早や一年以上の歳月が過ぎ去ってしまった。しかし私には、先生が昇天されたと言う事実を認める気持が全然湧いて来ないのである。本当に不思議な話で今でも夜ともなれば愛用の酒瓶の入った鞆を肩にかけ首には赤いネツカチーフと云つたいでたちで愛車メルセデスに乗り「そんな事あるまい」などと云いながら夏の席に錦奉行として顔を出す一見タリを思わせる風貌がとてもなつかしく目に

浮んで来るのである。とにかく人を退屈させない才能は抜群で、人間性豊かにして個性的な人柄は人々を魅了して止まないものがあった。

箱根先生との出会い

先生と初めてお会いしたのはもう二十五年以上も昔の事である。開業早々の頃で毎日忙しく動き廻っていた私は、仕事だけでなく何か趣味を持たないと人生つまらな

いと思ふ様な年令にはなつていた。それで小学生のころ図画が嫌いになつた事を思い出し家内に話したところ早速文雅堂の御應居さんを訪ね師匠として箱根寿保先生をすすめられてきた。ちょうど先生のソペリア訪問作品展がホリタで開催されていたので家内に連れて行つてもらつた(小生かくの如くシャイなのであった)。

会場の隅で、家内と先生の対話模様を

じつと見ていると、先生は家内が弟子になりたくて来たと思つた機だ。だが、実は弟子にして欲しいのは私でなくて向うで待機している主人である、と云われ仰天、しかし今更断りづらくなり、まあどうせと云う事になつてしまった。あの時は参つたよ、と後で時々聞かされた。人生こんなハプニングがあるので面白い世界が開けるのだと思ふ。

当時アトリエは白鳥町にあり、クレオパトラの様な美人の奥方と心豊かな毎日を送られていた様にお見受けした。なにせ三〇才代後半の若さであり、氣力・体力、共に充実した時期だつたのである。

ラバン・アジルの夜は更けて

開業医の仕事も漸く軌道に乗つた頃、子育てや雑用で苦勞をかけた家内にプレゼントをとヨーロッパツアーに参加させる事にした。友人二人との楽しい旅である。そのころ、先生は境すずみさんとバリ遊学中であつたがこの情報、奥方を通じて先生に伝わつたと思われる。

ホテル到着時間が不正確であつたので、先生、境さんそしてバリ在住の蛸子善悦さんと三人で、なんと四時間もの間ホテルで待つてくれていたと云う。漸く会う事ができ早速ドライブ・パリ案内となつたがこの車は五人乗り。さてこんなとき機転を効かすのはやっぱり先生、すぐ後部のトランクの中に入つてしまつたそうだ。さもありなんと目に浮かぶ光景ではある。六人の面々はパリの街を豊かに散策しながら、最後はモンマルトルはサクレトル寺院の近く、ユトリロの時代から人気のある居酒屋ラバン・アジルで夜遅くまで美味しいワインを飲みながら更けゆくモンマルトルの夜を満喫したという。なんとも美味しい話ではなからうか。

女帝三日月さまの話

樹々の緑に囲まれ落着いたムトの、五稜郭にある先生の家には国内外を問わず美に多くの人々が訪れて来た。そして御夫妻を囲みながらの客人たちの集まりは早速にも楽しい世界の開闢となるのである。そん

な中で女帝の如くいちはん大きな顔をして君臨しているのが云わずと知れたお猫様三日月であつた。

この猫様は昔前、生れて間もなくの状態で公園に捨てられていたのを先生が抱きかかえて持ち帰り箱根家の家族として愛情深く育てられて来たのであつた。家の周りには近所から猫様お犬様お鳥様など沢山集まつて来るのであるが、そんな雑兵相手にせずと云つた顔をしていたのが、このお猫女帝様であつた。しかし大恩人である先生御他界の後は彼女の大きな顔も何時の間にか萎びていき何処へか消え去つたのである。最後の姿を見た者は誰もいないと云う。

(三日月はおかしな名前である。最初泣いてばかりだったので三日月と名付けたらしい。勿論箱根先生の命名である)

(医師)

酒を矛と盾にして——エコール・ド・パコダテ 輪島進一

初夏。久しぶりに構図し、杉並・本町界隈を散歩した。そのとき思い立った。絵描きの本性を解放し、絵描きのたまり場をいとも簡単に作り、絵描きに好かれ嫌われずして愛された魅力的な絵描き、箱根寿保は……もうここにはいない。

二十五年前、杉並町にオランダ館という喫茶店が開店した。高校の美術講師をしていた私はできたてのその店の雰囲気が気に入り、毎日のように通い始めた。

マスターと親交のある箱根寿保が常連客となるのに時間はかからなかった。やがてそこは絵描きのたまり場になり、繰り返される飲み会の場となった。詩人、タウン誌編集の小説家、或いは芸術家もときの自由人たち……。一癖も二癖もある強者が臭いを嗅ぎ分け求めるように集まってきた。さらに場を盛り上げたのは文雅堂箱根教室と私の教室の生徒たちである。毎夜毎夜二時

三時まで。時には四時五時の明け方までのドンチャン騒ぎ。当然一般客は寄りつなくなり、三年あまりして店は潰れた。マスター一家は東京に職を見つけ、私たちは場を失い消沈。絵描きに合う店などそう簡単にあるものではない。

まもなく中央病院横にカチエーシヤがオープン。ママは私の幼なじみで、現在モリーエの経営者。ふたたび水を得た魚たちの毎夜のトンチャン騒ぎ。しかしその店は潰れなかった。酒癖の悪い私たちは時として「出入り禁止」となった。そうして次第に絵描きはおとなしくなっていく。ママは、絵描きのたまり場になれば店は潰れるのは分かっていたのだろう。

戦後、函館には絵描きがいっつきり「絵描きとして生きられる時間と空間」が二度あった、と私は考えている。一度目は鎌田俳条子が「アドナ」であった時代。つま

り四十年前の一九五九年。橋本三郎、岩船修三、さらに姥子善悦、木村剛文、箱根寿保ら錚々たるメンバーが赤光社を中心に活躍した時代だ。場所は大門松風町「風車」。連日馬鹿騒ぎが続いたという。そのとき私はまだ、芸術の麻薬を知らぬ純な小学生。二度目は、その十五年後の五畿郡は「オランダ館・カチエーシヤ時代」と自負している。

前者の六〇年前後は知的モダン志向の時代。モダニストと絵描きが同義語であった。その時代は絵画の隆盛期として異論は無い。比べて後者はどうか？ という年輩の人がいるだろう。しかし時は一九七五年、日本国内はポストモダン期の真つ只中、いわば消費の欲望と物質を美徳とするM・エンテの時間泥棒の異質。人の意識は、絵に描いた餅で心を満たす余裕など馬鹿らしくなっていく時代だ。そこに自然発生的に出

てきたオランダ館の仲間たちの数々のエピソードは確かに浮世離れていた。この二度にわたる絵描きの「隆盛期」の中心に、箱根寿保は位置していたのだ。

「エカキ」とは一体何だろう。画家とは違う。芸術家とも違う。もちろん美術家やアーティストなどとは全然違う。もつと得体の知れない無意識の存在だ。その内質は恐ろしく繊細で揺れやすいナイーブな自然そのもの。森羅万象の美神に仕える天性の

奴隷あるいは忠実な手先、美にひれ伏す哀れな虜であろうか。脆弱な虜にあつて人間の社会の外界刺激は針のむしろ。世間を生きるには、そのむしろの上を怪え職きながら歩くのに似ている。痛々しいのである。生きるためには武器を持つて野獣になるか道化になるか——それが絵描きの本性……ではないか。オランダ館での酔っぱらいナンバラン箱根寿保の、酒に狂い、酔いしれ、つぶれた姿にそれを見るのである。酒

はある時は鋭い矛、ある時は頑強な盾と変わった。眼がすわり、そしてからみ始める。たまつたものではない。彼の言動に私はどれだけ傷つきしかしその何倍も癒されたことだろう。飲むほどに、美の女神の手のひらで戯れ、いたぶり合い、愛撫し合う陶酔、愉悅感。私たちは酒の海の底に心の森羅万象を求め「生きられる。時空を共有したのだ。

(画家・独立展会員 小樽市在住)

天国に描きに出かけたディオニソス 高岡直道

ギリシヤの神々の中で芸術を司るのがアポロとディオニソスだ。

アポロは造型芸術(視覚的な、例えば絵画、彫刻、建築など)、そして精神性においても建設的な神。対するディオニソスは、ポエム・音楽などの時空を求める非造形的芸術を司り、しかも自己破壊的で自己陶酔の別の名をバツカスと呼ばれる享楽・

酒の神でもある。

この対極に位置するアポロとディオニソスを、『悲劇の誕生』の中でニーチェは、ニーチェ自身の自己矛盾の置き換えとして書いている。さらに、人間の救いを自らメシア(救世主)として降になったキリストと、すべての人間の弱さ・悪をさらけ出し世の淵を永遠に彷徨うディオニソスとの対

比も、ニーチェ自身の葛藤としてだけでなく十九世紀の世紀末的時代の悩みの代弁として書いた。

一九八六年夏、トルコ。

箱根さんと僕の一月あまりの旅行も終りに近づこうとしていた。エーゲ海の南の小さな町アランヤから翌日、一週間の船旅

でイスタンブールに帰るのだ。

エーゲ海の黄昏れが全てのを赤く染める頃、杯をかたむけながらトルコの旅の一日一日を思い起している二人の前に、トルコ女性があらわれた。箱根さんの人懐っこい笑顔は、全ての人々を彼の方へと向けさせるオーラを持っている。その女性は僕たちに話をしだした。そしてイスタンブールへ戻ったら是非たち寄るように、と名刺を渡した。

遺跡巡りをしながらのエーゲ海クルーズは、一ヶ月の旅の疲れを癒してくれる。そして船がなぎの海原を走る間、旅のさまざまな出来事を思い出させてくれる。

ある晩、田舎町で食事のそのときも、箱根さんの笑顔に五人ほどのトルコ人が寄ってきて家で一緒に飲もうと言う。彼らと一緒にいくところ、歯科医の診療室の椅子の上。夜中まで酒盛りが続いた。歯医者から貰ったその名刺を、箱根さんはいろいろな人に自慢げに見せてまわる。と必ずみんな大笑いをする。なぜ大笑いするのか尋ねると、抜歯専門の歯医者で、トルコの

国にそんな前時代的な歯医者なんかいない、と教えられまた大笑いされる。

奇岩で有名なカッパドキアで満月の夜、スケッチを始める。いさぎよい生きた曲線と糸針なものを省いた構図、箱根さんにしか表現出来ない世界に筆を進めていく。

トルコの街を歩くと路上や橋やらで、盲目、皮膚病、足の不自由な人などさまざまな病気の人が手を差し出して小銭を求めてくる。箱根さんは、必ずみんなに小銭をわたす。時にはお礼の場合もある。ところが、どう見ても病気と思えない人に小銭を出すのを見て僕が疑った顔をした時「どうしてお前さんは疑った目で人を見るんだ？ そんな考えたと人生をつまらなくするぞ」と言つてインドに行った話をした。

インドでは階級が複雑なので、金のあるやつにバクシシ(恵んで下さい)と言つて施しを求めるのは当然の事だ。箱根さんは、ある少年にバクシシといわれ、ポケットの中は空だぞ、とジエスチヤーをしたら、その少年が箱根さんにお金を恵んでくれたそうだ。



1995年9月9日 トルコ・ウルファにて

穏やかななきを滑るように進んだ船もデッキに出ると、そこには高いミナレットをいくつも持つモスク(イスラム寺院)がたくさん見えはじめた。もうイスタンブールである。

イスタンブール二日目の晩、僕はチエロのコンサートを聴くため一人で出かける事

にした。

箱根さんと、コンサート後の待ち合わせ場所を探していると、船旅のスタート地点アランヤのバーで出会った女性に偶然会った。驚いたけれど「渡りに船」とコンサートの間箱根さんと一緒にいてくれるよう僕は頼んだ。終了後、箱根さんと彼女の待つバーに行くと、シャンパン、ワイン、トルコの地酒のラク等の空き瓶がずらりと並び、箱根さんは周りに美しいトルコ女性を十人ほど待らせている。トルコに来ただからスルタン気分で大場のハレム経験を

しているのだという箱根さんに驚くやら呆れるやら。

しかし翌日、箱根さんにハレム状態の大宴会の感想を聞いてみると、全く記憶にないのだから実に勿体ない驚愕さである。

箱根さんは、音楽が大好きな人でもあった。僕の車に乗って「これコルトレーンだろ」とか「モーツァルトのピアノ協奏曲か?」とかすぐ反応し、特にモーツァルトを聴くとメラニコリーになつたり踊り出したりで感情の起伏が激しくなっていく。

大好きな曲は数々あつたけれど最たるも

のはワオレの「エレジー」。

二十世紀末にあつて、箱根寿保画伯は、さかさ十字架を背負つたままで酒を煽り続けながら、音楽を口ずさみながらキャンバスを抱えて永遠地獄の淵を彷徨っている最後の芸術家だった。彼こそ、ニーチェの苦悩でもあつたアポロ、キリストそしてディオニソスの化身そのものと思つている。

僕は、箱根さんにマルウオールドロン「レフトアローン」を、グラスを傾けながら捧げます。献杯!

(写真家)

星と月の自画像

木村訓文

四月二十一日午後十一時四十四分、箱根寿保の傷つきやすい魂は一本の放物線を描いて足早に去つてしまった。その夜、窓の外には尖つたラグビーボールのような月が赤味を帯びて西の空にひつつかつていた。よく整理されたアトリエに入ったわれわれ

は、壁に三号の小品「星と月の自画像」が掛けられてあるのを見た。長い髪を束ねて垂らし、月と星を見上げ、それらを指差す自画像。差し出す指の先は画面の中では月からも星からも大きくずれているが、そのために却つて、宇宙を強く意識していた作

者箱根寿保の思想がこちらに伝わってくる。小品であるにもかかわらず、時空の無限を包んで大きい。

月に寄せる人の思いのいろいろは、生成と消滅に結びつく。この小品の自画像の鈍く金色に光る月は月齢十九、身を削つて消

えていく姿である。月は、しかし蘇るが、人は帰らない。覚悟していたとしか言いようがない。凄絶な自画像である。

深い海が箱根寿保の体の中にあつた。水底には大量の淋しさとやさしさが堆積して、複雑な層を形づくっていた。哀しいまでのやさしさと、身を削つた乗での消滅を自らに予告する底なしの淋しさがあつた。やさしさは外に向かい、淋しさは己の存在を賭けて、自己の裡へと刺さる錐となつた。痛みは苛立ちと言ひようのない不安を生み、ときには怒りとなつた。錐の痛みから逃れる術は、意識の空洞化と旅の空漠へ遊ぶことだつた。

タビノハナシハヒトニハナスモノテハ
ナイ タビハジブンノアシアトナス
カゲテモアリアス イツシヨウツイテ
ハナレマセンテバ……

「和紙の東にハコネトシオの心が書き
遣されていた、そのひとつ」

今年一月、既に全道展出品作は完成、という明るい声の電話をもらった。彼はすつと体にも気をつけていたし、次のエジプト

旅行を綿密に計画しているのを見て、こちらも明るくなつてた。

箱根寿保が、突然逝つて、あとにその〇〇号が置いてあつた。サインをしていない。画題も書いてなかつた。あの電話のあとも更に手を加え、納得いくまでの、だがつらい制作を続けていたのだと思う。「星ミル自画像」やポートレートが飾られたアトリエは清々しく整理されていて、きれいな好き性格がそのままあらわれている。

だが、われわれが眼にした絶筆のその〇〇号は異様だつた。画面中央に大きく悼るのは男体とも女体とも或いは菩薩とも思える首のない白い裸体。その周辺をちぎれ雲のように漂う白い顔と顔と顔……。まぎ

れもなくそれらは箱根寿保の自画像の群だ。彼の水底から遊離した様々は、遂に白い幽鬼と化していた。

やさしさの更に奥には、秩序の骸をきちんと畳み、秘している人だつた。そして己を見据える覚めた直刀を懐にして歩いてきた箱根寿保の鋭さは、鋭さ故の脆さも孕んでいた。足元に開いている暗闇は、人間存在の根元を彼に問いかけ、かかえる混沌と無明の底を果てしなく覗きみることを要求した。繊細な神経は遂に疲労に耐え切れなかつた。

妻を愛し妻に愛され、多くの人に愛され慕われた。捨て犬、捨て猫ですら、長髪の画家から最良の安堵感を得るために自由に

中野産婦人科医院

院長 中野 茂行

函館市湯川町二丁目十五番十五号

(湯川ダイエー近・竹葉新薬亭向い)

☎ 五九一二三二一

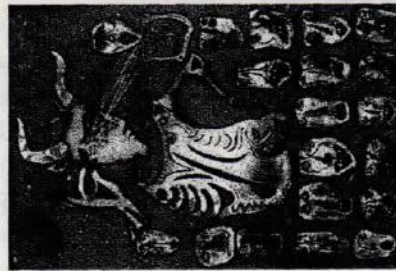
出入りしていた。生活の空間は多くのことで充滿していたのに、箱根寿保の純粋で過敏な心は哀しくも終始満ちることがなかつた。もうゆっくり休んで欲しい。もう自分を切り刻むことをしないで、ゆっくり休んで欲しい。

(一九九九年六月刊行・全道展図録より転載)

(画家)

煌くメタモルフオオシス—聖と俗の装間で

箱根寿保展



2000. 8. 19 (土) ~ 10. 15 (日)

休館日：月曜日、9/19、9/26 10:00AM-5:00PM (入場：300円)

主催／北海道立函館美術館、「箱根寿保展」市民実行委員会、北海道新聞社、FMC(福井)

■観覧料／一般620(510)円、高大生350(300)円、小中生250(200)円

※()内は10名様以上の団体料金

北海道函館美術館

函館市五輪通町37-6 TEL.(0138)56-6311

はこだて港まつり

株式会社 近藤 商会

代表取締役 池見 厚一

函館市西箱根町五八九(箱根センター)
TEL(0138) 四九一三三二一

㈱ ティーオ 小笠原

代表取締役 小笠原金悦

函館市港町三丁目一八一一五
TEL(0138) 四九一三九二一

石田労働管理事務所

社所 会長 石田 勉

函館市米広町十二番一号
TEL(0138) 二二一七七八

株式会社 丸豆岡田製麺

代表取締役 岡田 芳也

北海道亀田郡七飯町字中島十三一
TEL(0138) 六五八八一

江口眼科病院

院長 江口 甲一郎

副院長 江口 秀一郎

函館市米広町七番十三号
TEL(0138) 三三二七二二

加藤組土建株式会社

代表取締役 加藤 健太郎

函館市千歳町三番二二号
TEL(0138) 三三二七二〇一